

広島平和記念資料館の対話ノートから見る 原爆の記憶と死者

廣田 香

キーワード 原爆の記憶 広島平和記念資料館 対話ノート
計量テキスト分析

1. はじめに

広島への原爆投下と太平洋戦争の終結から77年以上が経過し、戦争や原爆の記憶をいかに後世に継承するかが課題になっている。その中で広島への原爆投下に関する記憶とその忘却に関して、複数の研究がなされてきた。米山(2005)は、焼け野原となった広島が「平和都市」となる過程について、ナショナル、トランスナショナル、ローカルといった複数の力がはたらいているとし、それらがそれぞれに原爆投下に対する典型的な語りを生み、強化した過程を論じた。また直野(2015)は、広島と長崎の被爆者たちの語りから、どのように原爆の記憶が形成され、変容していったかを、戦後日本社会(占領期から50年代を中心に80年代まで)との関係において考察した。これらは、過去を起点にした記憶の形成や忘却の過程に焦点が当たっている。また根本(2018)は、被爆体験の継承は今まで多くのメディアで語られ、多くの研究がなされてきたが、〈なぜ「被爆体験」を「継承」しなくてはならないのか〉という根底的な問いはほとんど取り上げられてこなかったという。そしてこのことは、それほどまでに被爆体験の継承は人々に受け入れられ、規範的価値が自明視されているという事を示していると述べ、継承が行われているとされる場の実際に着目する必要があると論じた。

具体的な活動を伴って継承に向けて積極的に働きかける人や組織に焦点を当て「いかに記憶を継承してきたか、しているか」という観点からの研究は多くなされてきた。しかしその中で焦点が当たってこなかったのは、特に何も活動をしておらず継承に積極的に働きかけていない、受け身の姿勢をとっている

人々である。根本が指摘した原爆の記憶の根底的な問いと継承の場への着目の必要性を踏まえると、目立たない一般の人々にも注目し、「いかに記憶が継承されてきたか、されているか」を明らかにすることは重要であると考えている。

本稿では、原爆の記憶の継承の場の一つとして広島平和記念資料館¹を、継承の受け手となる一般の人々の中の一つの層として来館者を据えた。そして彼ら・彼女らがいかに原爆の記憶に関わっているか、その一側面が現れるものとして、資料館において人々が抱く感想があると考えた。そこで注目したのが、資料館の来館者たちが感想等を書き残す対話ノート²である。

本稿の目的は、対話ノートの分析と考察によって今現在の人々がどのように原爆の記憶を継承しているのか、その一側面を示すことである。具体的には以下の通りである。2021年の調査当時に見ることができたノートのうち最も直近のものであった2020年1年間の対話ノートのコメントを対象として、計量テキスト分析を行い、その全体を可視化する。さらに、そこで明らかになったいくつかのコメントの傾向にはどのような背景があるのか、資料館の展示内容等を踏まえながら考察する。その後、来館者が自らの生を考えるとという部分に注目し、人々は資料館においていかに原爆による死者を捉え、接近し、自らの次元に取り込むのか、考察していく。

2. 広島平和記念資料館と対話ノートの概要

広島平和記念資料館は、広島原爆投下に関する情報を発信する博物館である。1965年に建設されて以降、日本・世界各地から多くの人々が集まる。資料館の目的として、広島市の広島平和記念資料館条例の第一条には「原子爆弾による被害の実相をあらゆる国々の人々に伝え、ヒロシマの心である核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に寄与するため、広島平和記念資料館を設置する」とある。

1 以下「資料館」と記載

2 対話ノートの活用の例として代表的なものは、2015年出版の、『ヒロシマから問う—平和記念資料館の「対話ノート」』という書籍である。これは1970年から2005年までの対話ノート920冊の中から327個のコメントが抜粋され、日本語のものは英訳が日本語以外の言語は日本語訳がなされて、年代別に並べられたものである。Chen (2012) や楊 (2013) は、この書籍のコメントを分類し代表的なものを引用して紹介している。

資料館の常設展示は、本館と東館に分かれる。本館では原爆が与えた人への被害に焦点が当たり、原爆投下以前・投下の瞬間・投下後の時系列に沿って、主に写真、被爆した物や説明のパネル、原爆の絵などの展示で「原爆被害の実相」が示される。東館では原子爆弾投下に至る経緯や人体への影響、さらには核開発の現在の状況、広島歴史や復興等に焦点が当たり、写真や文書によって説明される。

対話ノートは、1970年10月に設置された。それ以降、多くの人がこのノートに言葉を綴り、2022年1月時点でその数は1635冊に達していた。対話ノートの誕生の背景に関して、1970年頃は公害問題の深刻化やベトナム戦争の開始による平和問題への関心の高まりがあり、このような社会的背景と平和に対する来館者の思いをできる



図1 対話ノートの記載台³

るだけくみ上げて残したいとの思いがあったという（「対話ノート」編集委員会2005：7）。さらに前館長の志賀は、対話ノートについて「思いを巡らせ、湧き上がる思い、表現したくなったことを自由に書いていただくために用意されています。記述することで、この資料館での経験はより一層強く記憶に刻まれるのではないのでしょうか」と述べる（志賀2020：66-67）。



図2 対話ノートの表紙⁴

- 3 2021年10月19日 筆者撮影。丸で囲った部分が、対話ノートが置かれている台である。背の高い台と低い台がある。左手の窓ガラスからは平和記念公園が見える。
- 4 2021年10月19日 筆者撮影。右上にはノートの通し番号、中央には大きく「対話ノート」、その下には「ご感想をお記しください 記名・無記名は自由です」と記されたはんこが押されている。

ノートは、本館と東館を繋ぐ渡り廊下のギャラリーと呼ばれる場所の一角に置かれている（図1参照）。何も展示がなく平和公園が一望できるこの場所で、人々は一呼吸置き、今までの展示やそこでの想いを整理する。記載台（図1参照）の前で立ち止まった人の多くは、まずページをめくり、以前に書かれているコメントを読む。そこで立ち去る人、しばらく考える人、何かを書き込む人、連れを呼んで一緒にノートのをぞき込む人、子どもに何か書くように勧める人など、さまざまである。

3. コメントの分析方法

コメント全体に見られるいくつかの傾向を把握するために、計量テキスト分析という手法を用いた。樋口（2014）は「計量テキスト分析とは、計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理または分析し、内容分析を行う手法である。計量テキスト分析の実践においては、コンピュータの適切な利用が望ましい」と定義している（樋口2014：15）。この手法の特徴はコンピュータを用いた量的分析と質的分析の循環であり、量的分析によってテキスト型データに潜在する論理を取り出し、全体像を明らかにした上で、その結果を踏まえて、データの引用をしながら質的な分析・記述に重点を置いた報告が想定されている点である。本研究では、樋口耕一氏が開発したKHcoderというフリーソフトを用いた。

対象は、2020年の本館のノートのコメント⁵のうち、日本語で書かれて読み取ることができた、3184個のコメントである。抽出された語は、延べ86461個で、3894種類の語であった。ここから語の絞り込みとコーディングを行った。出現回数が31回以上で、意味が多義的な言葉など除き、その後単語の意味が似てい

5 期間は、新型コロナウイルスの影響によって休館していた期間を除く、1月2日～2月5日、2月25日～2月28日、6月1日～12月29日である。対話ノート番号は1610（2020年1月2日～2020年1月18日分）、1612（1月19日～2月5日分）、1616（2月25日～2月28日、6月1日～7月24日分）、1618（7月24日～8月20日分）、1620（8月20日～9月28日分）、1621（9月28日～10月5日分）、1622（10月5日～11月6日分）、1624（11月7日～12月29日分）。主に偶数の番号のノートを扱っているのは、ギャラリーに2冊置いてある中の1冊分のノートを扱うため。

表1 コーディングルール

語群名	単語	出現回数	割合
平和	平和	1079	33.89%
マイナスの感情	悲惨 かわいそう	740	23.24%
願う	願う	734	23.05%
戦争	戦争	718	22.55%
世界	世界 争い	554	17.40%
来る	世界中 来る	553	17.37%
生	訪れる	492	15.45%
今	命 今日 今回	482	15.14%
分かる・知る	勉強 実感	441	13.85%
原爆	被爆者 落とす	432	13.57%
起こる・繰り返す	繰り返す 起こる	382	12.00%
資料館	資料館 来館	340	10.68%
大切	写真 大事	335	10.52%
身体への言及	涙 目	328	10.30%
私	自分 僕	326	10.24%
見聞き	聞く	285	8.95%
広島	ヒロシマ	249	7.82%
感謝	ありがとう	231	7.26%
家族	子供 子ども	211	6.63%
未来	いつまでも 続く	210	6.60%
継承	残す 後世	196	6.16%
日本	日本人 世代	183	5.75%
生活	日々 人生	183	5.75%
気持ち	気持ち 思い	171	5.37%
忘れる	忘れる	163	5.12%
考える	考える	159	4.99%
幸せ	幸せ	157	4.93%
現実・事実	現実 事実	150	4.71%
死	死ぬ 亡くなる	143	4.49%
過去	当時 昔	130	4.08%
核	核 核兵器	128	4.02%
折る	折る	125	3.93%
無くなる・ダメ	無くなる ダメ	122	3.52%
私たち	私たち	98	3.08%
コード無し		194	6.09%
過去	当時 過去	194	6.09%
核	核 核兵器	128	4.02%
折る	折る	125	3.93%
無くなる・ダメ	無くなる ダメ	122	3.52%
私たち	私たち	98	3.08%
コード無し		194	6.09%

るものをコーディングして語群に分けた。このようにしてできた語群は、表1に示す通りである。なお、今後語群を表わすときは〈〉を用いる。これらの33の語群には、106個の単語が含まれているが、これらの単語が一つも含まれていないコメントは194個であり、全体の約6%である⁶。約94%はこれらの単語を一つ以上含むということであるので、これらの単語を対象とすることは、対

6 以下に例を挙げる。

何もわからない(1月10日 1610)、LOVE&ピース(1月21日 1612)、ご冥福をお祈りいたします。(10月7日 1622)、人道に対する罪を追求すべき。(11月1日 1622)、原発はゼロに。心底思いました。(11月19日 1624)

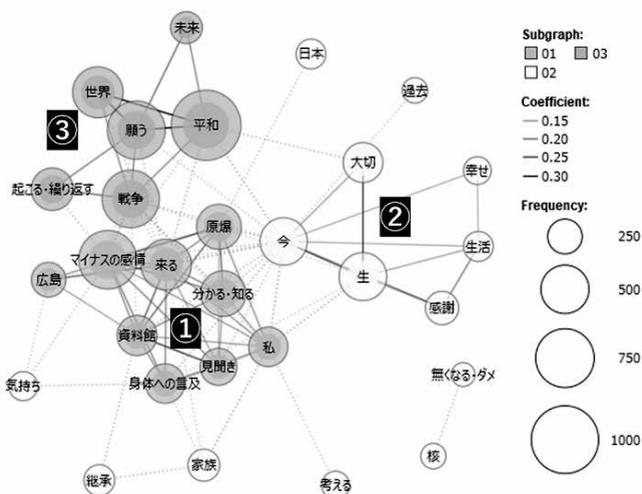


図 3 全体の共起ネットワーク図

話ノートで述べられていることの大まかに内容を把握するという目的に対して十分であると考ええる。

表1は、コーディング後のそれぞれの語群に属する単語が、全体の中で出現した数と割合⁷を示したものである。

4. 分析結果と考察

4-1 対話ノートの全体像

対話ノートの全体像を視覚的に示すために、それぞれの語群の共起の関係を表わした共起ネットワーク図を用いる。この図は出現パターンの似通った語、すなわち共起の程度が強い語を線で結んだネットワーク図（樋口2014：155）であり、共起を表わすためには、Jaccard 係数⁸を用いる。この値については0.1であれば関連がある、0.2であれば強い関連があると言える。図内において

7 出現回数 / 全コメント数

8 $J(A,B) = |A \cap B| / |A \cup B|$ Jaccard 係数は2つの集合に含まれている要素のうち共通要素が占める割合。

Jaccard 係数は、0.15であれば「.15」と記す。図3は Jaccard 係数が0.1以上の89の共起の関係を示した共起ネットワーク図である。

実線は同じグループに属する語群の共起の関係を示しており、破線は違うグループに属するが共起の関係があるということを示している。そして太い線で描かれているものほど強い共起関係を示している。

図3から、この対話ノート内のコメントで述べられていることの大まかな全体像が把握できると考えた。以下、大きく分けて3つのグループにコメントの要素が分けられた。

- ① 「資料館や広島に来て、原爆のことを見聞きし、知ったこと、さらに身体への言及を含むマイナスの感情の表現」
- ② 「今私が生き、幸せな生活をしている事への感謝、生の大切さ」
- ③ 「未来の世界平和への願いと戦争が繰り返すことへのマイナスな感情の表現」

このように対話ノートのコメントの要素を大きく3つに分類し、視覚化して示すことができた。

4-2 原爆に対する負の感情表現

3つのグループをより詳しく分析し、適宜コメントを紹介しながら詳しく見ていく⁹。

①のグループを構成する語群の中でも、〈マイナスの感情の表現〉〈身体〉〈見聞き〉〈わかる・知る〉〈原爆〉〈資料館〉の語群に着目し、それらを単語に分解して、それらの単語同士の共起の関係を表わした。図4は上位25位までの共起の関係をもとにした図である。

図4から、①はさらに①A、①B、①Cの3つのグループに分けられた。①Aは、「見る」、「悲しい」、「つらい」、「涙」、「写真」、「資料」、「伝わる」がキー

9 コメントの本文と日付、対話ノートの番号を記す。下線や省略は筆者によるものである。

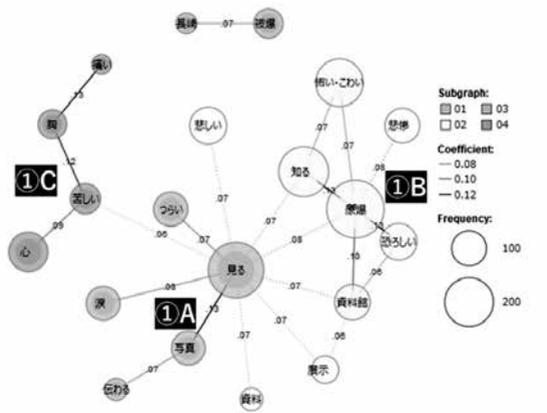


図4 ①の共起ネットワーク図

ワードである。以下にそれらを含んだコメントを挙げる。

① A-1 あの写真を見てとてもつらく苦しい思いが伝わってきました。とてもつらくて苦しくて悲しかったと思いました。絶対に戦争をしてはいけない。ただそれだけを思い続けようと思いました (10月15日 1622)

① A-2 私はこの戦争のこと、見て、ものすごく悲しかったです。自然に泣いてしまいました。(8月9日 1618)

① B は、「知る」、「原爆」、「こわい」、「恐ろしい」、「悲慘」、「資料館」がキーワードである。

① B-1 原爆の恐ろしさを知り、二度と戦争が起きてほしくないと思った。(8月10日 1618)

① B-2 僕は、この資料館で原爆による被害と恐ろしさを知りました。戦争によって罪のない人たちがいなくなっていくのは、とてもいけないこ

とだと思えます。ここで知ったことを誰かに伝えていきたいと思えます。

(10月16日 1622)

①Cは、「見る」「苦しい」、「痛い」、「心」、「胸」がキーワードである。

①C-1 とにかく“苦しい”の一言でした。途中で見るのをやめたくなくなるくらい胸が締め付けられる思いでした。今後の自分の人生、生き方にも大きく影響することになるでしょう。平和の本当の意味を考えながら千葉に帰ります。(1月20日 1612)

①C-2 自分まで苦しい気持ちになってとても心が痛かった。(10月21日 1622)

以下の表に、①の3つのグループの内容を整理する。

表2 来館者のマイナスの感情表現

	来館者の行為	〈資料館〉	〈マイナスの感情〉	〈身体〉	表現するもの
①A	知る	資料館 展示	恐ろしい 怖い・こわい 悲惨		原爆の恐ろしさ、怖 き
①B	見る	写真	悲しい、つらい	涙	自分の悲しみの感情
①C	見る		苦しい、痛い	心、胸	自分の苦しみの感情

資料館の展示を「見る」ことが「苦しい」、「痛い」そしてそこに「胸」や「心」がという表現が加わることもある。これによって、資料館で見たことを踏まえて、身体への言及も含めて自身の感情を表現しているという事がわかる。

では、来館者たちが資料館においてこのようなマイナスの感情を抱くのはなぜだろうか。寺田(2007)はホロコーストに関するメモリアルとミュージアムにおける、過去想起に伴う感情操作を論じた。「感情とは主体を取り巻く行為空間と切り離しがたく結びついている」とし、見学者の感情を喚起する要素として、感情を喚起する文言や、遺体の写真、時系列的な歴史表現等を挙げている(寺田2007:38,47,49,54)。

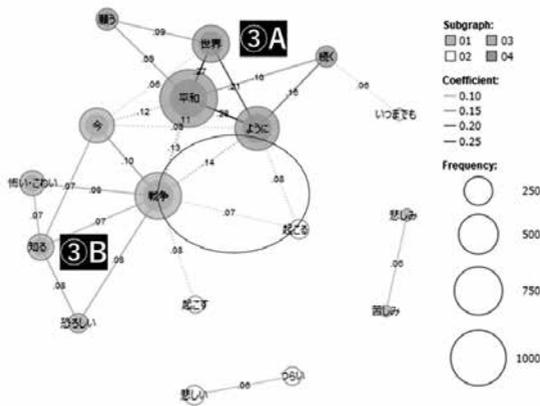


図5 ③の共起ネットワーク図

資料館からのメッセージとして、展示の導入部には「広島平和記念資料館は、(省略)世界の人々に核兵器の恐怖や非人道性を伝え(省略)」とあり、資料館の提示は来館者が核兵器の恐ろしさや非人道性を感じるように意図して設計されていると考えられる。ここで寺田の示した観点から展示の内容を検討する。感情を喚起する文言としては、展示内の「魂の叫び」「生きる」のセクションの名前、写真や遺品と共にある多くの被爆者の言葉¹⁰が指摘できる。さらに、遺体や傷を負った人を写した写真や描いた絵は多い。また本館でも東館でも時系列に沿った展示が行われている。

以上から資料館は、モノを時系列やストーリーに従って配置し、来館者を順路通りに歩かせることを通して、人々が特定の感情を引き起こすように誘導している側面があると考えられる。

4-3 戦争と平和

③のグループに関して 〈戦争〉〈平和〉〈願う〉〈世界〉〈今〉〈未来〉〈分かる〉

10 例えば、被爆直後の広島街の人々を撮影した松重美人さんの言葉として「頬に涙が伝い、ファイナダーを通す情景がうるんだ。まさに地獄だ」との文章が、彼が撮影した写真と共に示されている。

〈マイナスの感情の表現〉〈起こる・繰り返す〉の語群に注目し、語群を単語に分解してそれらの単語の共起の関係を図にした。図5は、上位40位までの共起の関係をネットワークの構造で示した図である。

③ A は、「世界」「平和」「続く」「ように」「願う」がキーワードである。

③ A-1 平和がこの先ずっと続きますように。(1月3日 1610)

③ A-2 世界の人々全てに平和を。 涙が出て止まらないです。(1月5日 1610)

③ A-3 平和な世の中に生まれてきてよかったと本当に思います。平和な世界になるように私も願っています。(11月11日 1624)

③ B は、「今」「戦争」「知る」「恐ろしい」「怖い・こわい」がキーワードである。

③ B-1 戦争の恐さを実感することが出来ました。二度とこのような戦争が起こらないように祈りたいです。(1月6日 1610)

③ B-2 改めて戦争は恐ろしいものだと知った (1月22日 1612)

さらに、楕円で囲った部分では、「戦争」「ように」「起こる」という3つの言葉が共起することが多いことを示している。ここからは、来館者たちの戦争を起こしてはいけないという反戦意識をみることができる。

また③のグループに関して、「平和」の語が一度以上用いられているコメントは、全体の約34%、〈戦争〉の語群に属する語が一度以上用いられているコメントは23%、同じく〈願う〉は23%、同じく〈マイナスの感情〉は23%である。出現頻度の上位4位の語群が、このグループに属していることから、対話

ノートにおいて、このグループが示すようなコメントが最も「よくあるコメント」であると言えるだろう。

ここで広島平和記念資料館条例の第一条を再び確かめてみる。「原子爆弾による被害の実相をあらゆる国々の人々に伝え、ヒロシマの心である核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に寄与するため……」との文言から、資料館側のメッセージの一つには「核兵器廃絶」があることが分かる。では対話ノートにおいて「核兵器」はどのように言及されているだろうか。表1より、「核兵器」と「核」の言葉を一度以上用いるコメントの数は128個、全体の約4%であり、〈戦争〉〈平和〉に比べると、非常に頻度が低い。

ここから、来館者たちの考えが向かうのは「核兵器」よりも大きな概念である「戦争」であると考えられる。来館者が資料館にて実際に考えることと資料館側の意図することには、少しのずれがあることを指摘できる。

中村（2021）は、東京都の平和博物館である「昭和三館」と「しょうけい館」について論じた。この2つの施設は、主に太平洋戦争中の国民や戦傷病者の労苦に焦点をあてたものであるが、来館者の感想には「このような戦争を二度と繰り返してはいけない」という平和主義や反戦意識が記されることが多いという（中村2021：352）。

それぞれの施設の来館者たちは、その資料館ならではの体験をして新しい知識や考えを持つようになるというだけでなく、「戦争反対と平和希求」という戦争に対する社会全体で非常に一般的な認識を確かめていると考えられる。ここから、平和博物館等の諸施設固有の戦争や平和に対する訴えや問題提起が、人々に十分に届いていない可能性が考えられる。

4-4 来館者自らの生への言及

②のグループを構成する語群〈生〉〈今〉〈大切〉〈生活〉〈感謝〉〈幸せ〉〈私〉を加えた7つの語群を対象にし、単語に分解して単語同士の共起の関係を調べる。図6は、以上の7つの語群に含まれる単語同士の共起の関係を表わしたものである。

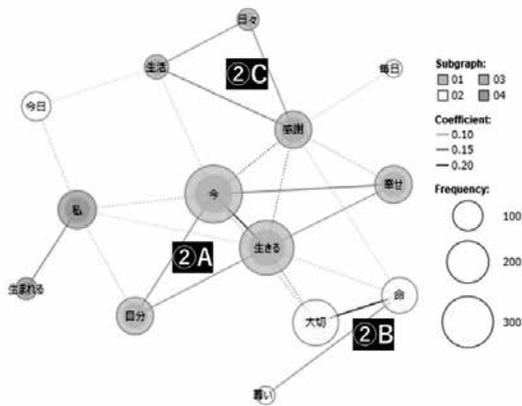


図6 ②の共起ネットワーク図

② A は、〈今〉〈自分〉〈生きる〉〈幸せ〉等がキーワードである。

② A-1 今この幸せがあたりまえでないこと。強くかみしめ生きていきたいと思います。(1月15日1610)

② A-2 資料館に掲示されていた言葉で“生きてあらば、ああもしよう、こうもしてやろうと思うことがある。”という言葉がすごく身に沁みました。今、ある命、私たちが生かされていると思うと、とてもありがたいことです。(省略)(7月26日 1618)

② A-3 初めて子供と母と妹と広島を訪れました。今あるこの幸せはあの時を生きたくても生きることのできなかつた方々の分まで大切にしようと思いました。(12月6日 1624)

② B のグループのキーワードは、〈命〉〈大切〉〈尊い〉である。

② B-1 かわいそうだったので命を大切にします。(1月4日 1610)

② B-2 被爆された方へ、未来の子供たちへ。私は小学校の時に、広島に見学に来ました。その時と今二度目の見学です。人の命は尊いもので大切にあり原爆など二度とあってはならない、知るべき真実である。核兵器などあってはならない。これからも平和でありますように。(7月29日 1618)

② B-3 初めてのドーム拝見。皆さんのご苦勞を感じ、自分の人生の幸せを感じ、これからの命を感謝し、これからの命を大切に生きていきます。(11月7日 1624)

② Cのグループは、〈生活〉〈日々〉〈感謝〉がキーワードである。

② C-1 日々、無事平穩に生活を送っていることに、感謝を抱かねば。そう強く感じました。(7月2日 1616)

② C-2 今の生活に感謝して、一日一日を大切に生きようと思いました。(8月6日 1618)

資料館の導入部には「広島平和記念資料館は、被爆資料や遺品、証言などを通じて、世界の人々に核兵器の恐怖や非人道性を伝え、ノーモア・ヒロシマと訴えます」とある。したがって資料館の公式のメッセージとして、「自らの生について考えてほしい」「日々の生活に感謝して大切にしてほしい」ということは想定されていないように思う。「核兵器(原爆)の悲惨さ」と「平和への願い」という資料館の大きな二つのメッセージと並んで、この来館者自らの生に言及するような記述が重要性をもって見えて来たということは特筆すべきと考える。さらに、来館者たちが自らの生や幸せに目を向けて感謝するこの態度は、西村の言う「パフォーマティヴな記憶」の現れではないかと考える。西村(2014)は、死者をめぐる生者の対応には未来へと積極的にかかわる側面があ

るといふ。そして「生者を歴史の主体として未来に向けた行為（問題解決プログラム）へと駆り立て、新たな歴史へと参入させるダイナミックな働きを持つもの」を「パフォーマンスな記憶」とした（西村2014: 3）。

来館者たちは資料館で原爆による死者をどのように捉え、自らの生と死と関連付けているのだろうか。

5. 被爆者の死と来館者の生と死

5-1 死と「私」の関係

そもそも人間は死者をどのように捉えうるのだろうか。ジャンケレヴィッチは死にゆく人との関係における私（＝自分）の位置がその死の位相を決めるといふ考えで、死を論じた。第一人称の死とは、自分自身に対する再帰的な観点からの死である。しかし「私」が死んだとき、私はすでに生きておらず意識することができないので、われわれは死を実際に経験できない。それゆえ自分の死についての不安や恐怖や死後への想像力が掻き立てられる。第二人称の死とは、他人の死であっても家族などの親密な関係にある人の死であり、「私」は「あなた」の喪失の打撃にさまざまなかたちで悩まされることになる。第三人称の死は、自分とは直接的に関係がなく、悲劇性を持たない客観的な死である（ジャンケレヴィッチ1978：24-36）。芹沢（2008）は、個人にとっての死に関して、誰もが詩から逃れられないという意味で絶対性を帯びているにも関わらず、そのことに不安や恐怖・嫌悪を喚起されることなく他人事でいられる場合、それは知識としての死、第三人称としての死だからであると述べる（芹沢2008：161-162）。

では、来館者たちは原爆による死者をどのように捉えていると考えられるだろうか。前述の通り、来館者たちは原爆に対し恐怖を感じ、自らの生への言及もしていることから、芹沢が言うような全くの他人事の第三人称の死として、資料館における原爆による死者を捉えているとは考えにくい。

鈴木は、二人称の死者以下で第三人称の死者以上となる死者を「二・五人の死者」とし、先祖や震災被災者、戦死者等を例に挙げる。二人称の死者の記憶を

三人称の死者として忘れ去ってしまわないように儀礼や慰霊碑の建立などを行うことによって、死者は集合名詞化した「二・五人の死者」となるのだという（鈴木2018：164-167）。来館者の多くは原爆による死者と対面関係は持たないが、微妙な親密感をもって捉えていると考えられるため、来館者が資料館において対峙する原爆による死者も「二・五人称の死者」と言えるかもしれない。しかし鈴木が論じたのは、死者と対面関係を持つ人がその二人称の死者を「二・五人称」へと変化させることによって、死者の記憶を保持する装置がつくられるプロセスであり、死者と対面関係を持たない人がその装置に組み込まれたとき、どのように「二・五人称の死者」を捉えるのかという具体的検討はない。本稿で考えたいのは、対面関係を持たない第三人称の死者であるはずの死者が、いかにして生者自らに引き寄せられるようにして捉えられるのか、ということであり鈴木論とは逆方向の視点である。

また芹沢は、自分の身に起きる出来事として死を想像し動揺を覚えるのは、死が外在的な認識の三人称の次元を離れ、自分という一人称の生の次元に移動することで、他人事から自らにも起こり得るものとして死を捉えるからであるという。そしてその移動の例として、至近距離で多くの死に立ち会った経験から自分の死ぬ様子を想像することや、病気によって死が圧倒的な現実を伴った問題として迫ることを記述している（芹沢2008：163-181）。第三人称的な死が第一人称的な死へ移動している例として、西村（2006）が言及した、被爆者にとっての原爆による死者と慰霊もその一つであると考えられる。戦後の長崎において全市的な慰霊が行われるようになったのは、他人の死の瞬間や遺体や遺骨という死後の姿を偶然目撃し、自分もそうになっていたかもしれないという「一人称的死への実存的不安」が掻き立てられたからであるという。これは自らも「あの死体」になっていた可能性があるという現実的な恐怖だ（西村2006：199-201）。

資料館での体験は、芹沢や西村が挙げる事例のような死が直接的に身に迫るようなものではない。しかし②のグループの結果から、来館者の中には被爆による死を見ることを通して、自らの生や死に対する考えを深めている人もいる

と考えられる。したがって本稿では、来館者たちは資料館での体験を通して、他人事として第三人称的に捉えられるはずの原爆による死者を自らに引き寄せ、自分の生と死に対する考えを深めていると考えてみたい。では、資料館での体験のどのような性格が来館者と死者を近づけるだろうか。

5-2 不穏な死が喚起する死への恐怖

Stone (2012) は、ダークツーリズムを「死、苦しみ、一見不気味なものに関連する観光地への旅行行為」と定義し、グラウンド・ゼロやアウシュビッツ・ビルケナウ等を例にし、ダークツーリズムが、そこで示されている死と観光客たちの生と死を媒介しているという考えを示す。ダークツーリズムの場合は死や苦しみを展示することによって、観光客に自らの死を思い起こさせる「メント・モリ」の性質を持っており、そこでの体験は死の物語を消費することではなく避けられない死に直面して人生と生活を熟考することだという (Stone2012 : 1575,1581)。Stone の論を資料館での人々の経験に当てはめるのならば、彼ら・彼女らは資料館で避けられない死の運命を実感し、自らの生について考えるきっかけを与えられていると考えられる。資料館が死者と生者を媒介する場になっていると言っても、何がどのように両者を媒介するのだろうか。

その一つに、不穏な死の恐怖があると考えられる。Stone によると、ダークツーリズムの場が死者と生者を媒介する理由の一つには不穏な死に対する恐怖があり、残存する不穏で喚起的な記憶の概念が人々の恐怖を喚起し、自己と重要な他者である死者との間を仲介するということである (Stone2012 : 1578-1579)。

資料館では、手のひらで目を覆いながらなるべく展示を見ない様にして足早に歩く子どもの姿が時々見られる。また資料館の展示を通して感じた恐怖やショックが強く表れているコメントも多く存在している。

5-2-1 思ったよりひどくて、途中気分が悪くなった。(12月1日 1624)

5-2-2 今日はじめてきた。ひさんすぎた。こわすぎて体がすくんでうごけなくなりそうになった。(10月7日 1622)

さらに、生者と死者を結びつける媒介物のひとつに写真があると Stone は述べる。写真は、自己が他者である死者と出会うための鮮明な道具であるとし、故人や故人が死んだ場所のイメージは、避けられない死を思い起こさせるものとなるという (Stone2012: 1575)。死者の写真とその恐怖に言及しているコメントを以下に挙げる。

5-2-3 絵や写真を見て怖いと思った。それほど怖いんだと思った。(8月10日)

5-2-4 人が死んでいる写真がきつかった。(10月1日 1621)

5-2-5 私が一番印象にのこったのは骨がたくさん写っている写真です。今もこんなひどいことが起きていると思ったら恐ろしすぎます。もうこんなことをこれからも起きてほしくなります。(11月6日 1622)

5-2-6 人の遺体とかをみてぞっとした。怖かった。戦争いやだ。(10月14日 1622)

来館者は展示、特に写真がありありと示す「不穏な死」を目の当たりにし、恐怖を感じていると言える。原爆によって1945年の終わりまでに死亡した人の数は14万人と言われている¹¹。この大量の死はまさに不穏な死である。展示されている原爆の絵の中には、川に浮いた死体や複数の遺体が積み上げられて火

11 広島市によると、原爆による死者数は様々な機関によって調査されてきたが、正確な数はわかっていないという。14万人というのは、1945年の12月末までに死亡したと推定される人の数である。(広島市 市民局 2019)

葬されて様子を描写したものがあり、本館の展示の最後には被爆から7年後に発掘された無数の頭蓋骨が映る写真がある（2022年1月時点）。さらに皮膚が垂れ下がるほどの大やけど、ガラス片が刺さっている身体、放射線の影響によるケロイド、胎内被爆による小頭症などは、原爆がもたらす特有の苦しみであり、不穏な死を連想させる。

来館者たちはこのように原爆による死を目の当たりにすることを通して死を意識し、自らのうちに第一人称的な死に関わる問題として取り込み、「こわい」という感情として表出させていることのように思える。

さらに「死にたくない」「生きていく」といった言葉も対話ノートに見られる。

5-2-7 お母さんが死ぬのが、いちばんいやだ、死にたくない。死なないでほしい。(10月11日 1622)

5-2-8 なきそうになった。でもなくてそれからどうするかかんがえた。ほくはいまのいのちをたいせつにしようと思った。(8月23日 1620)

5-2-9 死なない、生きていく。(8月8日 1618)

5-2-10 ずっと自殺したいと思っていましたが今日ここに来て、「生きよう」と思いました。(11月15日 1624)

これらのコメントの背景として、来館者たちが資料館において死の運命とその表裏一体の関係にある今の生の存在を実感し、目の前にした不穏な死の恐怖と忌避の反応として命を大切にしようとの思いが生まれた、と考えられる。

5-3 被爆者の体験に自らを重ね合わせる

対話ノートのコメントの中には、展示における被爆者に共感するようなものが多くある。次に挙げるコメントは、展示で示される被爆者の被害やその苦し

みを追体験することを試みていると考えられるものである。

5-3-1 戦争を見ていた気分だった。(10月12日 1622)

5-3-2 当時の人々の苦しみや悲しみがほんの少しでも追体験できたような気がします。この思いは生涯忘れないようにしていきます。(11月21日 1624)

5-3-3 自分が被爆者の立場だったら苦しいなと思いました。(10月2日 1621)

来館者たちは、館内を順路に沿って移動して展示物を見ることによって、資料館が示すところの「原爆の物語」を自らの身において再現していると考えられる。

5-3-4 晴れ渡った空の中で一つのそれが落ちてきて、大きなそれが、見上げる間もなく破裂し、時が止まったのが怖いと思う。時は止まったのに確かに流れ出して辛苦とか痛みとか、それにくらがりの中でこらえていた人々の目を思うと、悲しいと思う。「ごめんダメだ」と言って、「ありがとうございました。これを宮島に届けてください」と定期を渡す少年に、いつまでも頭が上がらない。ちゃんと生きているのだろうか、と問いかける。ちゃんと私は生きてもいいのだろうか。(9月5日 1620)

このコメントは、原爆投下の様子を「晴れ渡った空の中で一つのそれが落ちてきて、大きなそれが、見上げる間もなく破裂し、時が止まった」と具体的に想像している。そして、その中で生きた必死に少年と、自らの生き方を重ね合わせ「ちゃんと生きているのだろうか」「ちゃんと私は生きてもいいのだろうか。」と自らに問いかけている。

ここで資料館における体験を、ポール・コナトンの記念式典と身体を考えを用いて考えてみる。彼は、記憶の共有を可能にする伝達行為について記念式典と身体の実践を論じ、「過去のイメージと過去について回想された知識のイメージが（多かれ少なかれ儀礼的な）パフォーマンスによって伝達され、維持されるとわれわれに教えてくれる」と述べる。記念式典は、単に参加者に神話的事件を思い出させるというよりはその事件を再現させるものであるという。参加している人があたかもその事件の時代を生きているかのように感じられると、神話の美化された現実は何度となく再現され維持されるという（ポール・コナトン2011：69,121-126）。資料館を見て回ることは、この記念式典の考えが一部当てはまるように思われる。資料館を順路通りに歩いて展示を見て回る身体的な行為によって、投下前、投下、投下後の一連の物語が来館者の身に再現される。そのような形で彼ら・彼女らは「原爆の物語」を想起しているのかもしれない。

またコメントの中には、自分自身と資料館における被爆者の共通点に触れているものがある。例えば、被爆者と自分は、同じ広島にいるという共通点である。

5-3-5 10代さいごの夏休みにこうして広島を訪れることが出来ました。彼、彼女らは確かにこの土地にいた。そのことが身にしみてわかる展示でした。平和を守ることの大切さ、これからも心に留めます。（8月6日 1618）

5-3-6 私達は広島にいる。澄んだ青空、木々を揺らす心地よい風、道を行きかう人たち「おはよう」一日の始まりだ。きっとあの日もそうだったに違いない。1945年8月6日。ここ広島は一発の原子爆弾が投下された。その下には、私達と同じ、その日を生きる人たちの生活があった。経った一発の原子爆弾に、破壊しつくされ、一瞬で十数万人の尊い命が奪われた。親や兄弟。（10月1日 1621）

5-3-7 後ろの広い平和公園、その下に原爆で亡くなった数々の人の命があり、生活があったことを感じた。核兵器に戦争に、人間どこまで残酷なことができるのかと思うと怖くなる。(10月2日 1621)

5-3-8 ここに入るまえはさわがしかった。でも、ここまできたときにはしずまりかえていた。そして、ひろしまのきねん品として、持って帰ろうとした小さなひろしまのくさを見る。(10月7日 1622)

「あの悲惨な出来事が起こった、まさにその土地に立っている」という意識は、自らと被爆者の心的な距離を近くするように思う。筆者は広島市中心部に流れる川を見ると、川が描かれた原爆の絵を連想し、原爆投下直後の人々の様子を想像することがよくある。火災を逃れようと多くの人が駆け込んでいく川、たくさんの死体が浮かぶ川……。広島土地も川も、被爆以前から今現在まで存在し続けていることからそこにずっと流れて来た時間を想定することができ、過去を想起する枠組み¹²になるのである。過去と現在を、被爆者と今生きる自身をつなげるのが、この空間の意識なのではないだろうか。

さらに対話ノートには、ほかにも来館者自らと被爆者の共通点を記したコメントがある。

5-3-8 平和公園には何回か訪れていますが、8月6日当日は初めてのことです。平和ほど大事なものはないと改めて感じた日です。(8月6日 1618)

5-3-9 1946年8月6日に生まれました。何かの運命かと勝手ながらに思っています。自分の生活を大切に、生徒の生活を大切に、その日々を送るだけで幸せなのだとして改めてここへ来て感じました。平和が一番。(8月8日

12 モーリス・アルヴァックス (1989)、浜 (2000) 浜 (2002) 等、集合的記憶に関する議論を参考にしている。

1618)

これらのコメントは自身が、原爆が投下された「8月6日」に平和公園を訪れたこと、誕生したことに触れ、「8月6日」という共通点を強調しているようである。

5-3-10 火傷は指だけでもすごくいたいの…… (9月19日 1620)

このコメントは、自らが火傷をした時の痛みを思い出し、それを展示で示される被爆者の苦しみに重ね合わせているように思われる。このコメントを書いた人は、自らと被爆者は同じ人間であり、同じ痛みを感じる感覚を持っているという共通点を見出していると考えられる。

さらに、自らが被爆者と同じ幼い子どもであるということ、子どもを持つ母であるということに共通点を見出し、自らをそこに重ね合わせて悲しみの感情を募らせる人もいる。

5-3-11 私も同じような小さな子供たち、学生がたくさん被害に遭っていてとてもつらかった。なんで、なんで、こんなことが起こってしまったのだと悔やむばかりです。(11月15日 1624)

5-3-12 祖母が被爆者で私は三世です。昔から話を聞いたり、学校で学んできましたが、自分が母親になり、改めてこちらへ訪問しましたが、胸が締め付けられる思いです。この火傷にあえぐ子どもが、自分の娘だったらと思うと涙が出ました。改めて戦争は恐ろしい。そして今平穩に過ごせていることがありがたいと感じた。(9月3日 1620)

被爆者と自らを、同じ土地や同じ時間にいること、そして痛みを感じる人間、同じ子供、親であることといった、具体的なことがらで重ね合わせるような言

及が見られた。来館者は、このような具体的な回路によって、来館者は被爆者の体験を自らに引き寄せ、死者へアプローチしていると推測できる。

5-4 死者の想起と「犠牲の上に今がある」の言説

コメントのなかには、「あの世」の死者の存在を想起しているようなものも見られる。

5-4-1 もう二度とこんなことになってほしくない。亡くなった人が天国では幸せであってほしい。(12月2日 1624)

5-4-2 みんなあの世で幸せに暮らしている事を心より願っています。じいちゃんによろしくお伝えください。(7月23日 1616)

西村は、「靈魂」の観念が死者と生者を媒介する「共鳴」「共感」の役割を持っているとし、「慰霊の場に臨む生者が、過去の記憶（それは時には、その生者個人の内的な記憶というより、集団によって共有された過去に対する認識＝歴史である場合もあろう）にたいし、それを理性的認識の対象として距離を取るのではなく、直感的にリアリティとして受容するありかた」と説明した（西村2006：23）。これらのコメントには、過去の記憶を、リアリティを持って受容する在り方として、死者の靈魂に対する生者の靈魂（精神）の「共感」のはたらきが見られるようである。

さらに来館者たちは、原爆による死者またはその靈魂への共感の感情を持つだけでなく、それに対して自らの生における積極的な意味を付与していることが推測できる。それは、「被爆者のおかげで今がある」との考えである。

5-4-3 多くの尊い犠牲のもとに、いま私たちが生きている、生かされている、という事を重く受け止めたいと思います。過ちは繰り返しません。安らかに眠ってください。(8月22日 1620)

5-4-4 今の暮らしがあるのは、被爆者たちが憎しみや苦しみの中で、後世にこんな思いをさせてはならないと思ってくれたからであることが、改めて分かりました。今が平和に生きていられることに、私たちは感謝しなければならない。(6月16日 1616)

5-4-5 現代の幸せが、多くの方々の尊い命の犠牲の上にあることを忘れず、感謝し、精一杯今を生きていきたいと思います。(11月3日1622)

さらに、来館者が死者との関係性を踏まえた上で、自らの生を積極的に捉えているようなコメントも見受けられる。

5-4-6 「生きたい!」そう訴えられているように感じました。被爆者のためにしっかりと生きます。二度と起きないように。(2月5日1612)

5-4-7 先人たちがつないでくれた命を懸命に生きよう。(10月5日1621)

資料館で示されているのは、目を覆いたくなるような苦しみであり、死である。しかし、これらのコメントは、原爆による死者の存在をふまえつつ、自らの死を積極的に捉えているように思われる。西村(2006)は、慰霊概念を「シズメ」と「フルイ」に整理した。「シズメ」は暴力性そのものや暴力を被った結果死亡した者が、現世に対して残していたと考えられる思いなどを沈静化させることであり、「フルイ」は、同じく暴力によって死亡した者が、現世に対して残していた思いを喚起して新たなアクションを起こす契機とするような事態としている(西村2006:24-29)。原爆死没者慰霊碑の碑文「安らかに眠って下さい 過ちは繰返させぬから」に現れている態度が、社会的なフルイであると考えれば、ここに現れている原爆による死者を踏まえた自らの生への積極的な態度は個人的なフルイと言えるだろう。

さらに違う角度から「犠牲の上に今がある」というフレーズを考えてみたい。直野は「平和の礎論」を展開した。原爆で親しい人を亡くした遺族は、その死者を慰霊するために平和への努力を語ったり、その犠牲によって平和がもたらされたとの意義を付与することで慰めを得ようとしたりしたという。そこには死を「世界平和」や国家という大義と関連付けないと死んだ者が浮かばれないとの思いがあったとのことだ（直野2015：152、138-139）。「原爆による死者は今現在の世界平和の礎になった」という「平和の礎論」は、第二人称的な死の悲しみに対処するための考え方であったといえるだろう。

では、なぜこの言葉が第三者である来館者が被爆者を語る上で使われているのだろうか。それは、被爆体験と戦後の日本人の意識に関係していると思われる。広島と長崎の原爆の記憶は、戦争における「大規模な被害の物語の代表格」として、日本に広く行き渡っているという（橋本2017：114）。それは、占領支配を受けた国民体験が、広島と長崎の原爆体験に重ね合わせられ、戦争「被害者意識」に収斂されたからで（奥野2010：82）、そのような原爆の記憶の国民化によって、被害者意識を基盤にした「共感の共同体」が成立したという（直野2015：128）。

資料館はその開館以降、原爆の悲惨さを広島市民のみならず広く国民に対しても示し続けて来たことから、原爆の記憶の国民化に対して重要な役割を果たした場所であり、被爆体験と国民「被害者意識」が融合した「共感の共同体」の観念が生み出されて強化された場であると考えられる。このような意味で資料館は、訪れた日本人たちが「被爆者の犠牲の上に今の自分達の国民としての生活がある」という「ナショナルな平和の礎論」とでもいえるような考えを持つに至る、言説装置のような側面があると言えるかもしれない。そうであるならば、来館者は個人として展示に向き合い死者を想起するのみならず、言説装置の影響を受けてナショナルな死者を想起していると考えられることができる。

6. 本稿での計量テキスト分析の限界

本稿では日本語で書かれた文章を文字のデータとして扱ってきたため、日本

語以外の言語で書かれたコメントやイラストなどに触れることが出来なかった。さらに量的な分析では重要性を持って現れなかったコメントも扱うことが出来なかった。それらについて、簡単に紹介していく。

日本語以外の言語として筆者が認識できたものは、英語、中国語、韓国語、スペイン語、アラビア文字であった。さらには多くの国からの来館者のコメントもあった。「from ○○（国の名前）」などの記載から明らかになったのは、アメリカ、中国、台湾、韓国、イタリア、インド、イギリス、フランス、インドネシア、ブラジルなどであった。英語で書かれてあるものを一部紹介する。

6-1 Working through the exhibits and hearing each unique and heartbreaking stories (1月2日 1610)

6-2 I hope God lets me punish you In the fail one day Never again (1月10日 1610)

6-3 God only knows (1月10日 1610)

6-4 Remember Peul haver (1月22日 1612)

6-5 I am American. I am deeply sorry for our terrorism unleashed on Aug 6, 1945. There are no words (6月22日 1616)

6-6 fuck off Americans we love you Japan. I feel much worried about this situation happened in Hiroshima more love from SriLanka (8月25日 1620)

さらに、数は多くはないが、人の顔、犬、うさぎ、国旗のようなものの絵も見られた。

またある人が書いたものに対する反応と見えるようなものも頻繁にある。た

例えば「you started the war (9月18日 1620)」というコメントの隣に、「←×」とかかれていた。また「○○(名前)は、世界の平和を願っています!!(2月5日 1621)」という記述の下に、「私も」「僕も」「私も」と、同意を示すようなものもあった。

またノートに備え付けてあるのはボールペンで、コメントのほとんどはそのペンで書かれているため、消すことはできない。一部分がペンで塗りつぶされて書き直されているものも多くみられた。それは単に書き間違いを訂正するようなものがほとんどだが、他者によってそれがなされたようなものもある。たとえば、「アメリカ人、fuckyou! (6月6日 1616)」のコメント、「死ね!!! (11月23日 1624)」と書かれたコメントは、その上から何度もペンで線が引かれていた。

また日本語のコメントとして分析の対象とはなかったが、量的な分析では数が少なくても重要性を持って現れなかったようなものもある。その中には、以下のような政治的に過激なコメントもある。

6-7 これは確実にアメリカの戦争犯罪ですね。恐ろしい。(11月8日 1624)

6-8 どうして天皇を死刑にしなかった。(8月31日 1620)

また、資料館の展示とは全く関係のないことに言及しているものもある。

6-9 メリークリスマス2020 (12月26日 1624)

6-10 カーブ (8月13日 1618)

来館者のコメントがすべて図5のようにわかりやすく3つに分けられ位置づけられるということではなく、多様であることは最後に強調しておきたい。

7. おわりに

本稿はこれまでの原爆の記憶に関する研究においてあまり焦点があたってこなかった、記憶の継承の受け手である一般の人々にとっての「原爆の記憶」を探るべく、広島平和記念資料館の対話ノートに着目した。コメントの計量テキスト分析においては、共起ネットワーク図によってコメントの全体像を示し、特徴的な三つの言説（①原爆に関して知ったこととマイナスの感情の表現、②自らの生や命の大切さへの言及、③戦争反対と世界平和への願い）を抽出した。さらに質的な分析としては、資料館の展示内容等を踏まえてその言説の背景を考察し、特にその後来館者が自らの生を考えるとという部分に焦点を当てた。それは、計量テキスト分析により「核兵器（原爆）の悲惨さ」と「平和への願い」という資料館の大きな二つのメッセージと並んで、この記述が重要性をもって見えて来たからだ。来館者のほとんどにとって、原爆による死者は第三人称的に捉えられるはずであるが、資料館における体験は、その死を自らに引き寄せ、自分の生と死に対する考えを深めるものであると考えられた。そこで、人々が展示にいかに対峙し、被爆者特に死者を捉え、接近しているかを考察した。その結果、不穏な死が喚起する死の運命の実感、被爆者との共通点の意識による被爆体験への接近、原爆による死者の靈魂への共感を基盤にした積極的な生への態度が見えて来た。また本稿ではほとんど論じることができなかったが、資料館の言説装置としての働きとその影響も示唆された。

参考文献

「対話ノート」編集委員会、2005、『ヒロシマから問う—平和記念資料館の「対話ノート」』かもがわ出版。

Chen Chia-Li 2012, "Representing and interpreting traumatic history: a study of visitor comment books at the Hiroshima Peace Memorial Museum." *Museum Management and Curatorship*, 27(4), 375-392.

M・アルヴァックス 1989、『集合的記憶』（小関藤一郎訳）行路社。

R. Stone Philip 2012, "DARK TOURISM AND SIGNIFICANT OTHER DEATH:

Towards a Model of Mortality Mediation.” *Annals of Tourism Research* 39(3), 1565-1587.

- V. ジャンケレヴィッチ 1978、『死』（仲沢紀雄訳）みすず書房。
- ポール・コナトン 2001、『社会はいかに記憶するか』（芦刈美紀子訳）新曜社。
- 小川伸彦 2002、「モノの保存の記憶」、荻野昌弘、小川伸彦、アンリ・ピエール・ジュディ他編、『文化遺産の社会学 ルーヴル美術館から原爆ドームまで』新曜社。
- 荻野昌弘 2002、「文化遺産への社会的アプローチ」、荻野昌弘、小川伸彦、アンリ・ピエール・ジュディ他編、『文化遺産の社会学 ルーヴル美術館から原爆ドームまで』新曜社。
- 奥田博子 2010、『原爆の記憶 ヒロシマ／ナガサキの思想』慶応義塾大学出版会。
- 志賀賢治 2020、『広島平和記念資料館は問いかける』岩波書店。
- 鈴木岩弓 2018、「死者を忘れない“死者の記憶”保持のメカニズム」、鈴木岩弓、森謙二編、『現代日本の葬送と墓制 イエ亡き時代の死者のゆくえ』吉川弘文館。
- 芹沢俊介 2003『経験としての死』雲母書房。
- 芹沢俊介 2008、「なぜ人は死に怯えるのだろうか」、島蘭進・竹内整一(編)、『死生学1 死生学とは何か』東京大学出版会。
- 竹沢尚一朗 2015、『ミュージアムと負の記憶—戦争・公害・疾病・災害：人類の負の記憶をどう展示するか』東信堂。
- 寺田匡宏 2007、「現代のメモリアルとミュージアムの場における過去想起にともなう感情操作の特徴 ポーランド・ベウジェッツ・メモリアルとベルリン・ホロコースト・メモリアルの空間構成と展示による過去表現に関する比較研究」、『国立歴史民俗博物館報告』第138集、37-62
- 直野章子 2015、『原爆体験と戦後日本 記憶の形成と継承』岩波書店。
- 中村江里 2021、「〈国民〉の〈労苦〉—昭和館、しょうけい館」蘭信三、小倉康嗣、今野日出晴（編）、『なぜ戦争体験を継承するのか—ポスト体験時代

の歴史実践』みずき書林.

西村明 2006、『戦後日本と戦争死者慰霊—シズメとフルイのダイナミズム』
有志社.

西村明 2014、「物と場所に込められた魂—パフォーマティヴな記憶としての
戦地慰霊—」、『東京大学宗教学年報 本冊』31、1-16.

根本雅也 2018、『ヒロシマ・パラドクス—戦後日本の反核と人道意識』勉誠
出版.

根本雅也 2021、「原爆の災禍から何を学ぶのか」、蘭信三、小倉康嗣、今野日
出晴（編）、『なぜ戦争体験を継承するのか—ポスト体験時代の歴史実践』
みずき書林.

橋本明子 2017、『日本の長い戦後』（山岡由美訳）みすず書房.

浜日出夫 2000「記憶のトポグラフィー」、『三田社会学』5、4-16.

浜日出夫 2002、「他者の場所—ヘテロトピアとしての博物館」、『三田社会学』
7、5-16.

樋口耕一 2014、『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発
展を目指して』株式会社ナカニシヤ出版.

広島市 2019年10月1日、広島平和記念資料館条例、最終閲覧日：2022年11月
24日、参照先：[https://www.city.hiroshima.lg.jp/kikaku/houki/reiki_int/
reiki_honbun/r500rg00000343.html](https://www.city.hiroshima.lg.jp/kikaku/houki/reiki_int/reiki_honbun/r500rg00000343.html)

広島平和記念資料館 2020年9月、広島平和記念資料館リーフレット、最終閱
覧日：2022年11月24日、参照先：[https://hpmuseum.jp/modules/
xelfinder/index.php/view/2047/japanese_s.pdf](https://hpmuseum.jp/modules/xelfinder/index.php/view/2047/japanese_s.pdf)

福島在行 2021、「総論—平和博物館は何を目指してきたか—ポスト体験時代
の歴史実践」、蘭信三・小倉康嗣・今野日出晴（編）、『なぜ戦争体験を継
承するのか—ポスト体験時代の歴史実践』、みずき書林.

米山リサ 2005、『広島記憶のポリティクス』岩波書店.

楊小平 2013、『広島平和記念資料館における原爆体験の継承の在り方とその
変容』博士論文、広島大学.

Memories of the Atomic Bombing and those Killed as Recorded in the Visitor Log at Hiroshima Peace Memorial Museum

Kaori Hirota

This paper focuses on visitor comment books at Hiroshima Peace Memorial Museum, which called 対話ノート in order to explore “memories of the atomic bombing in Hiroshima” for the general public, who are considered to be the passive recipients of the memory. In Quantitative Text Analysis of the comments, a co-occurrence network diagram was used to present an overall picture of the comments, and three characteristic discourses were found: (1) expressions of knowledge and negative feelings about the atomic bombing, (2) references to the importance of one's own life, and (3) opposition to war and a wish for world peace. For qualitative analysis, I considered the background of the discourses based on the contents of the museum's exhibits. Especially, I focused on the part of visitors thinking about their own lives. This is because Quantitative Text Analysis revealed the importance of this description as well as the two main messages of the museum: “the horror of nuclear weapons” and “a desire for peace. For most visitors, the deaths caused by the atomic bomb should be viewed as the third person, but the experience at the museum was thought to cause them to deepen their own thinking about life and death by attracting these deaths to themselves. I examined how people faced the exhibits, and how they regarded and approached the A-bomb survivors, especially the dead. As a result, we found a sense of mortality evoked by the disturbing deaths, an approach to the A-bomb experience based on a sense of commonality with Hibakusha, and a positive attitude toward their own life based on empathy for the souls of the dead caused by the atomic bombings. In addition, the function of the museum as a discursive device and its impact were also suggested.